

多岐亡羊の感あり

尾張中央 瀧本 守

道に迷つたり、わき道にそれたり、目標を見失つたような時は、原点復帰しかない。その昔、ロータリーの原点はシンプルで、もう少しわかりやすかつたのではないかと思うのだが、規模が大きくなるにつれ複雑化し、時代とともに価値観も変わって、ロータリーの看板も光が鈍くなった。

これはある程度致し方なしとするも、不変であるべき理念の変化がうかがえるようなことが、会員減少の原因に関わりがあるとす

なら、ここは一つ考えなければならぬ。

最近、寄り合うたびに会員増強のことばかり。それは確かに必要なことだろう。国際的な奉仕プロジェクトに、会員の浄財は大きな力となる。またロータリー財団の基金は会員の増減に関係し、どうしても会員の確保は至上命題とならざるを得ない。しかし、ロータリーの発展はそのためだったのだろうか。

職業人の最も優れた倫理運動と評された職業倫理も、ロータリー内部では、主たる座を譲つてしまつたような状態、これでは類似する奉仕団体と何ら変わらないではないかと言われても返す言葉がない。ロータリーが本来の目的のた

めに堅持してきた、一業種一会員制や規則的例会出席の原則を曲げてみても会員増強にはつながらなかったことなど、これら全てが何を意味するかは、説くまでもない。まず会員数の減少を憂うより、ロータリーが永久に不易としてきた価値観の減退こそ憂うべきではないか、と最近思えてならない。

『莊子』の教えにこんな話がある。ある家の下男二人が羊の番をしていたが、二人とも羊に逃げられてしまった。主人が何をしていいかと叱つたところ、一人は「本を読むのに夢中だった」と答え、一人は「さいころ遊びに気をとられていた」と答えた。二人のやつていたことは、天地の開きがある。だが羊番という肝心の目的を忘れ

た点では二人とも同じである。要は、真の目標を見失わないことだ。

(第二七六〇地区 愛知県 印刷業)